

I 本県の漁業をとりまく概況

1 日本の漁業・養殖業

日本の漁業・養殖業生産量は近年減少傾向にあります。このような状況の中、水産資源の持続的利用の確保と水産業の健全な発展のために、種苗放流などの栽培漁業推進や漁場の整備、資源管理型漁業の定着を図るなどの諸施策が講じられています。

なお、平成21年における日本の生産量（547万トン）は、中国（6,047万トン）、インドネシア（982万トン）、インド（785万トン）、ペルー（696万トン）に次いで世界第5位でした。

表1 日本の漁業養殖業の生産量 単位:千トン

	昭和60年	平成5年	平成10年	平成20年	平成21年	前年比(%)
合計	12,171.2	8,706.7	6,684.2	5,597.2	5,391.0	96.3
海面漁業計	10,876.9	7,256.1	5,314.8	4,373.4	4,147.3	94.8
遠洋漁業	2,111.3	1,138.6	809.3	473.9	442.9	93.5
沖合漁業	6,497.6	4,256.4	2,923.8	2,581.0	2,411.0	93.4
沿岸漁業	2,268.0	1,861.1	1,581.7	1,318.5	1,293.4	98.1
海面養殖業	1,088.1	1,273.9	1,226.8	1,146.4	1,202.0	104.8
内水面漁業・養殖業	206.2	176.7	142.6	77.4	41.7	53.9

1)資料 茨城農林水産統計年報
2)前年比(%)は平成21年/平成20年

表2 日本の漁業養殖業の生産額 単位:億円

	昭和60年	平成5年	平成10年	平成20年	平成21年	前年比(%)
合計	28,905.5	24,887.9	20,291.5	16,271.9	14,726.9	90.5
海面漁業計	21,919.0	17,169.5	13,386.1	11,242.9	9,741.9	86.6
遠洋漁業	6,828.1	4,142.2	2,395.6	—
沖合漁業	7,582.5	5,657.2	4,909.8	—
沿岸漁業	7,508.4	7,363.6	6,073.6	—
海面養殖業	5,225.0	6,069.1	5,463.9	4,177.7	4,095.0	98.0
内水面漁業・養殖業	1,761.5	1,649.3	1,441.5	851.3	890.0	104.5

1)資料 茨城農林水産統計年報
2)前年比(%)は平成21/平成20年

※遠洋漁業生産量は、遠洋かつお一本釣等により減少した。
沖合漁業生産量は、大中型1そうまき網その他等により増加した。
沿岸漁業生産量は、小型底びき網等により減少した。

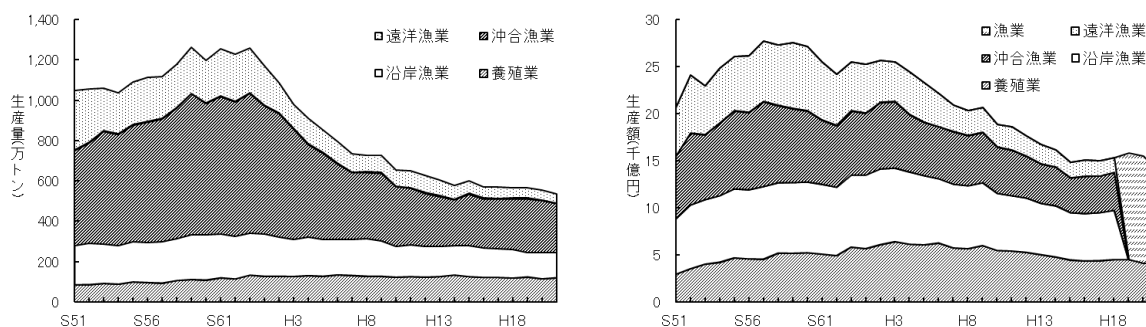


図1 日本の漁業・養殖業の生産量及び生産額の推移

※平成19年調査より生産額の部門別集計は統計対象外となったため、平成19年以降グラフは各漁業種での表示ではなく、漁業でまとめている。

2 日本の水産物貿易

昭和 46 年に輸入額が輸出額を上回り、その後その差は拡大してきましたが、近年輸入は減少傾向を示しています。輸出についても、平成 19 年までは増加傾向にありましたが、近年は減少傾向にあります。主な輸出品目は、まぐろ・かじき類、えび、さけ・ます類、いか、かに、うなぎ調整品等となっています。

○平成 21 年の 輸入量 : 12,596 千トン (前年より 172 千トン 6.2%減)
 輸入額 : 12,967 億円 (前年より 2,729 億円 17.4%減)
 輸出量 : 498 千トン (前年より 21 千トン 4.1%減)
 輸出額 : 1,728 億円 (前年より 359 億円 17.2%減)

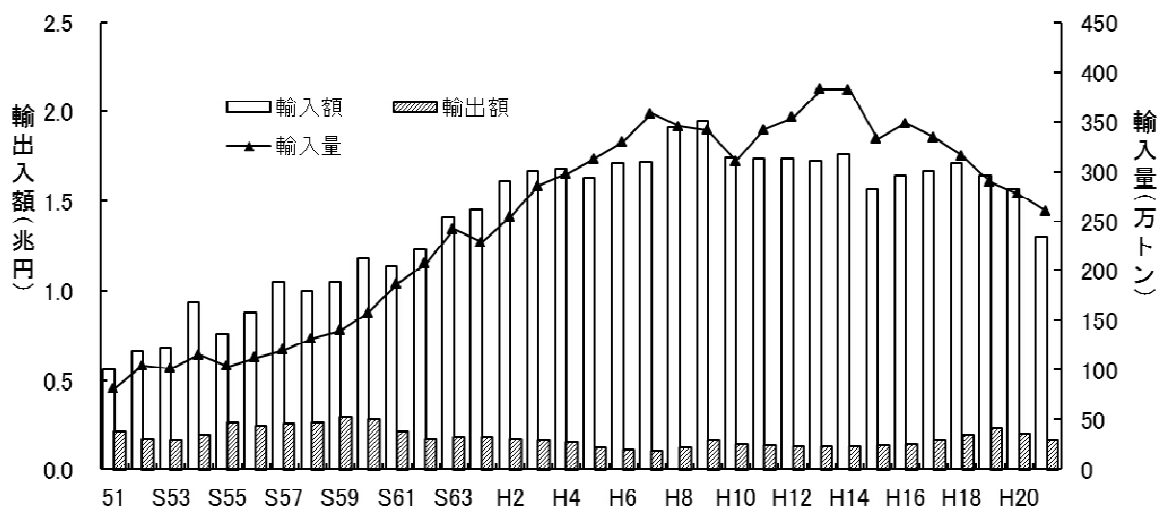


図 2 日本の水産物輸出入額と輸入

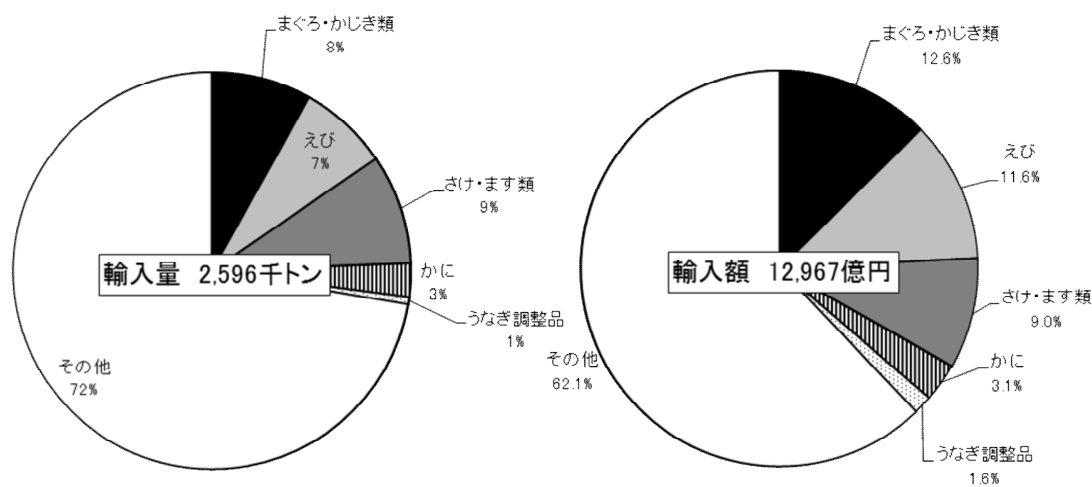


図 3 日本の水産物輸出品目別割合(平成 21 年)

3 茨城県の水産業の概況

(1) 海面

茨城県の海は、沖合では親潮と黒潮が交錯して流れ、沿岸ではこれら海流から派生する分枝と沿岸水が混合する水域となっています。そのため、まいわし、かたくちいわし、さば、さんま、かつお、しらす、いかなご、つのなしおきあみ等の寒・暖流性魚類の好漁場が形成されています。また、茨城県の海岸線は南北に約 190km にも及び、湾部のほとんどない単調な地形ですが、県中央部に流れる那珂川を境に北は磯場となり、あわび等の漁場に、南は砂浜で二枚貝（鹿島灘はまぐり、ほっきがい等）の好漁場となっています。さらに沿岸域に分布する天然礁は、すずき、ひらめ、かれい等の比較的定着性のある魚類の漁場となっています。平成 21 年の海面漁業生産量は全国 8 位で、中でもさば類やまいわしの生産量は全国 2 位となっています。

また、茨城県では高い漁業生産力を活かして様々な漁業が営まれています。遠洋・沖合漁業では大中型まき網、さんま棒受網、かつお一本釣、沖合底びき網等が、沿岸漁業では船びき網、小型底びき網、刺網、釣、はえ縄、採貝等が代表的な漁法です。一方、養殖業は海岸線が単調で湾などがなく静穏域が確保されないため、陸上施設でのあわび養殖等が行われているのみとなっています。

主な漁業基地は、北から平潟、大津（北茨城市）、久慈（日立市）、那珂湊（ひたちなか市）、大洗（大洗町）、鹿島（鹿嶋市）、波崎（神栖市）の 7 地区であり、各地区の主要な漁業種類は次のとおりです。

平潟（沖合底びき網、沿岸漁業）	大津（大中型まき網、沿岸漁業）
久慈（沿岸漁業）	那珂湊（かつお・まぐろ、沿岸漁業）
大洗（沿岸漁業）	鹿島（沿岸漁業）
波崎（大中型まき網、沿岸漁業、内水面漁業）	

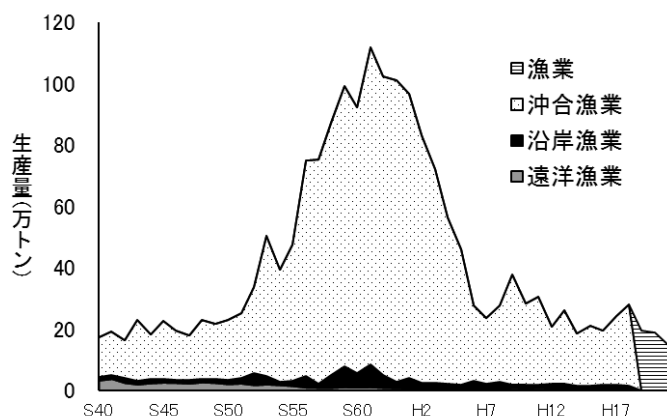


図 4-1 海面漁業生産量の推移
※平成 19 年調査より部門別集計は統計対象外となったため、平成 19 年以降は漁業でまとめている。

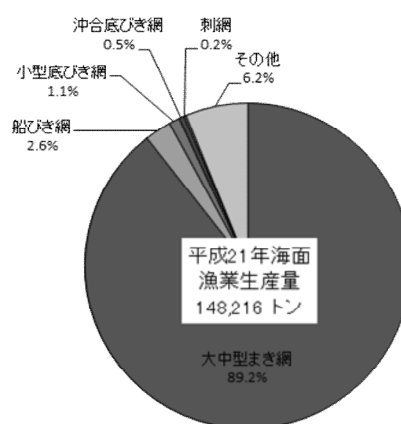


図 4-2 各漁業種別生産量の割合

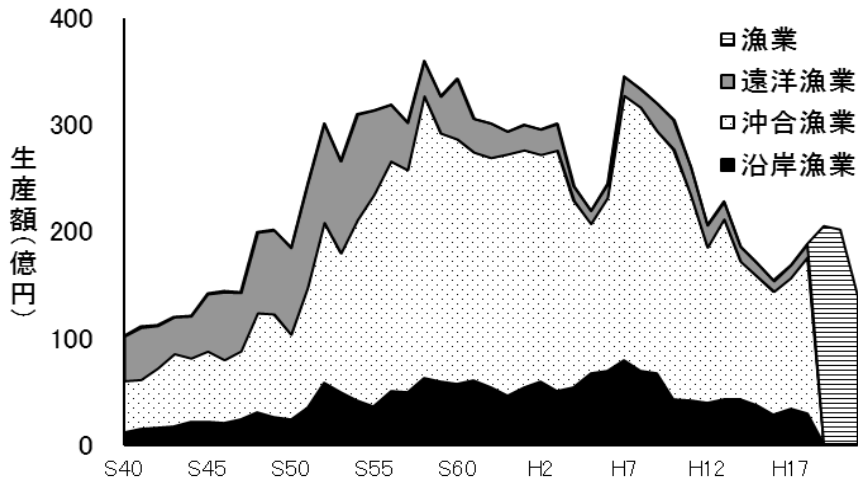


図5 海面漁業生産額の推移

※平成19年調査より部門別集計は統計対象外となったため、平成19年以降はグラフは各漁業種での表示ではなく、漁業でまとめている。

表3 平成21年海面の都道府県別漁業生産量と順位 単位:トン

順位	1	2	3	4	5	8
都道府県	北海道	長崎	宮城	千葉	静岡	茨城
生産量	1,332,131	270,937	232,588	191,992	186,532	148,216

表4 平成21年海面の都道府県別漁業生産額と順位 単位:億円

順位	1	2	3	4	5	26
都道府県	北海道	長崎	静岡	宮城	青森	茨城
生産額	2,262	720	538	533	413	138

※ 生産額で全国順位が低いのは、単価が安いさば類やいわし類等の漁獲割合が高いため

●資料編 1-1, 2-1, 2-3, 2-4

(2) 霞ヶ浦北浦

茨城県の南部に位置する霞ヶ浦北浦は、琵琶湖に次ぐ国内第2位の面積(220 km²)を有しています。海跡湖であることから、平均水深は約4 m、最大水深でも7 mと極めて浅い湖であり、また、底生魚介類の現存量が多いことが特徴です。霞ヶ浦北浦は古くから漁業が盛んな湖であり、漁船漁業としてはわかさぎ・しらうおひき網(通称トロール、底びき網の一種)、いさぎ・ごろひき網(通称:横ひき網、底びき網の一種)、張網(定置網の一種)等が営まれ、養殖業としては、網いけす養殖(小割式養殖)と淡水真珠養殖が営まれています。網いけす養殖では、こい、ふな、アメリカナマズ等の養殖を行っています。こい養殖については、平成15年以降コイヘルペスウイルス(KHV)病の発生により休止されていましたが、KHV病耐性コイの生産技術の開発などにより、平成21年4月から再開されました。

漁船漁業で漁獲される主な魚介類は、わかさぎ、しらうお、えび類、はぜ類(地方名称:ごろ)、こい、ふな等であり、特にわかさぎは霞ヶ浦北浦のシンボリックな存在となっています。

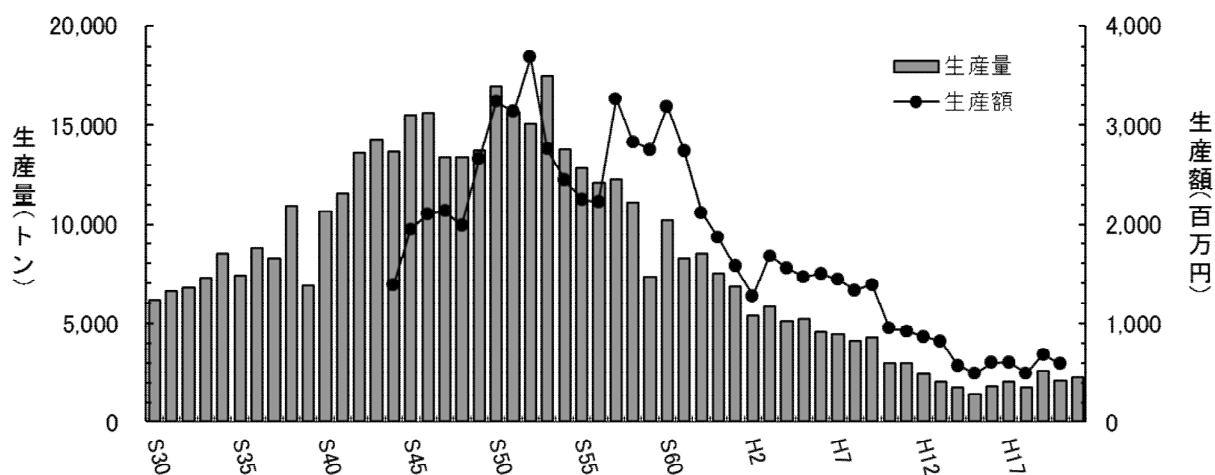


図6 霞ヶ浦北浦の漁業生産量と生産額の推移 (H21年度より生産額は非公開)

●資料編 2-5~2-10

(3) 内水面

茨城県には利根川や那珂川、久慈川等大小合わせて227の河川と、涸沼や牛久沼等の湖沼があり(霞ヶ浦北浦及び外浪逆浦は除く)、しじみ(那珂川:主に涸沼川, 涸沼), あゆ(那珂川, 久慈川), こい・ふな(利根川)を対象とした漁業が営まれています。特にしじみは全国でも有数の産地となっています。

また、県北部の山間地域では、主にます類の養殖が行われています。

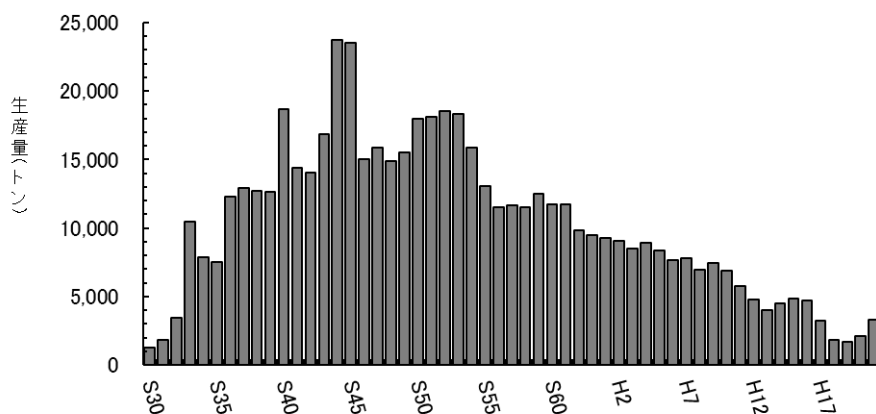


図7 内水面漁業生産量の推移

表5 平成21年内水面漁業の全国順位(霞ヶ浦北浦含む)

単位:トン

順位	1	2	3	4	5
都道府県	北海道	茨城	青森	島根	岩手
漁獲量	12,748	5,517	4,961	3,862	3,173

●資料編 2-11~2-14

II 漁業生産

1 海面漁業 - 漁業生産（属人）の動向 -

本県海面漁業における生産量は、主に大中型まき網漁業により漁獲される、いわし類やさば類といった多獲性魚類の豊凶で大きく変動します。漁業生産量の動向としては、昭和40年以降は20万トン前後で推移してきましたが、昭和53年から55年のさば類の豊漁や、昭和55年以降のまいわし資源の急増によって増加し、昭和61年には112万トンまで達しました。その後、まいわし資源が大きく減少したことなどにより、近年の生産量は20万トン前後となっています。

表6 茨城県の漁業養殖業の生産量

単位:トン

	昭和60年	平成5年	平成10年	平成15年	平成20年	平成21年	前年比(%)
海面漁業計	923,193	460,715	284,137	212,810	191,010	148,216	77.6
遠洋漁業	8,868	2,602	6,078	5,425	-
沖合漁業	867,584	439,981	263,917	195,329	-
沿岸漁業	46,741	18,132	14,142	12,055	-
海面養殖業	28	22	X	8	X	X	-

1)資料 茨城農林水産統計年報

2)前年比(%)は平成21年/平成20年

3)海面漁業は平成19年調査より、部門別集計をとりやめた。

表7 茨城県の漁業養殖業の生産額

単位:百万円

	昭和60年	平成5年	平成10年	平成15年	平成20年	平成21年	前年比(%)
海面漁業計	34,269	21,861	30,449	16,985	20,075	13,804	68.8
遠洋漁業	5,689	1,230	2,786	1,244	-
沖合漁業	22,974	14,055	23,493	12,042	-
沿岸漁業	5,606	6,576	4,170	3,700	-
海面養殖業	51	56	66	21	X	X	-

1)資料 茨城農林水産統計年報

2)前年比(%)は平成21年/平成20年

3)海面漁業は平成19年調査より、部門別集計をとりやめた。

●資料編 2 - 1 ~ 2 - 4

(1) 各漁業部門と漁業種類別の動向

① 遠洋漁業

かつお・まぐろ漁業は、200海里等国際的な漁業規制の強化や2度にわたるオイルショック等により厳しい経営を余儀なくされたため、昭和56~58年及び62年に自主減船を実施しました。また、母船式さけ・ます流し網漁業は、旧ソ連の200海里漁業水域の設定、さけ・ます母川回帰主義の台頭による操業水域の規制や漁獲量の大幅削減、日ソ漁業協定に基づく漁獲割当ての大幅な削減により、昭和52年と61年に自主減船を実施しました。さらに、平成5年には公海流し網漁業が禁止されたことに伴ういか流し網漁業の消滅があり、生産量・生産額ともに大きく落ち込みました。その後、生産量は若干回復し横ばいを続けていますが、生産額は平成10年をピークに減少傾向を示しています。

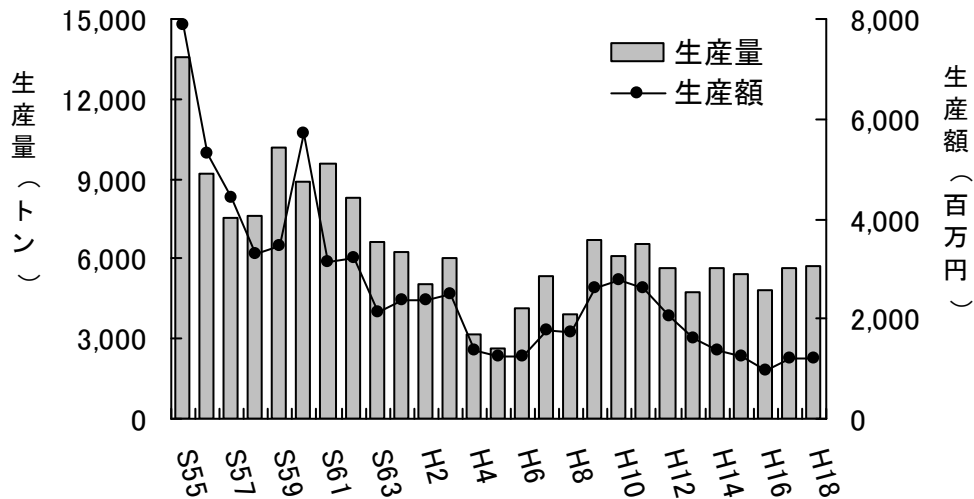


図 8 遠洋漁業の生産量と生産額の推移
 ※平成 19 年調査より部門別集計は統計対象外

●資料編 2-1

②沖合漁業

沖合漁業の生産量は、昭和 50 年代以降、さば類、まいわし、さんま等の好漁により増加してきましたが、平成に入ってからはいわし資源が低水準期に移行したため、その生産量は著しく減少しました。

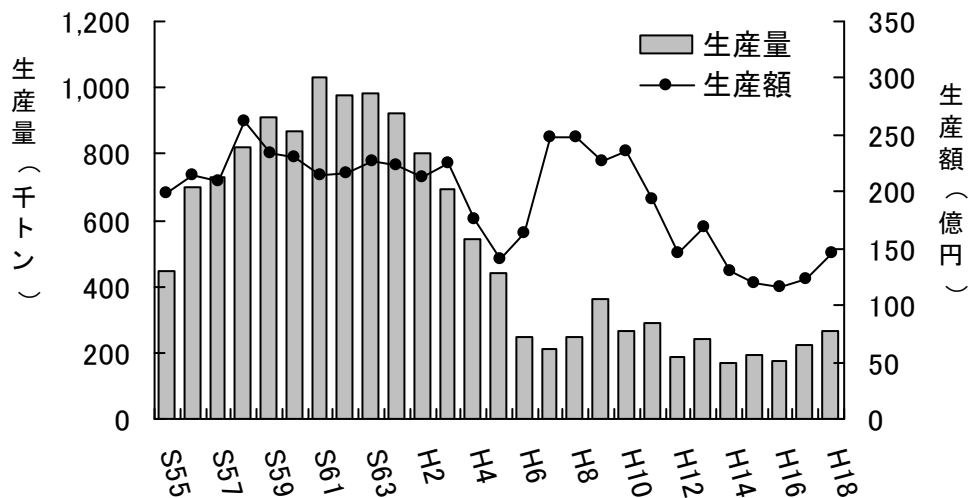


図 9 沖合漁業の生産量と生産額の推移
 ※平成 19 年調査より部門別集計は統計対象外

●資料編 2-1

【大中型まき網漁業（1 そうまき網その他）】

大中型まき網漁業は本県の基幹漁業であり、平成 21 年においては海面漁業生産量の 89.2%を占めており、経営体数は平成 20 年において 11 経営体となっています。

大中型まき網漁業の主な対象魚種である、まいわしやさば類、まあじでは、水産資源の持続的な利用を図るため、平成 9 年以降、漁獲可能量 (TAC) 制度による資源管理が実施されています。さらに、平成 15 年からはマサバ資源回復計画が策定され、資源管理に取り組んできた結果、まさば資源の減少に歯止めがかかってきています。

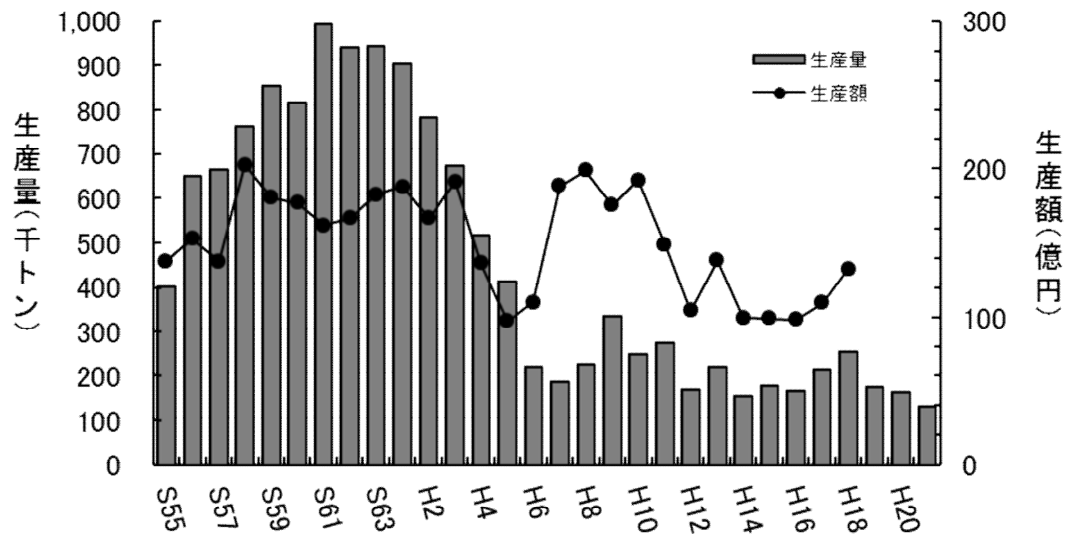


図 10 大中型まき網漁業の生産量と生産額の推移

※平成 19 年調査より生産額は統計対象外

※昭和 61 年以降の生産量の急減は、まいわし資源の減少による

●資料編 2-2

③沿岸漁業

本県海域には、季節や海況によって南方と北方、両系の資源が来遊します。そのため、本県の沿岸漁業では、船びき網や底びき網、刺網、ひき縄釣り等の多様な漁法が発達し、漁業者はその時々漁況に応じた漁業種類を選択して操業しています。なお、主な沿岸漁業の主要漁期と主な漁獲対象は表 8 のとおりです。

表 8 主な沿岸漁業の主要漁期

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
主漁業・主魚種・漁期	船びき網															
	← (し ら す) →															
	(さより)												(おきあみ)			
	← (いかなご) →															
	流し網 (いなだ・たい)				固定式刺網 (ひらめ・かれい)											
	えび板びき網 (さるえび)								せん・かご (あなご・ばい)				えび板びき網			
	貝けた網 (鹿島灘はまぐり)															
ひらめ				一本釣り・ひき縄釣り かつお・めじ・いなだ ひらめ												

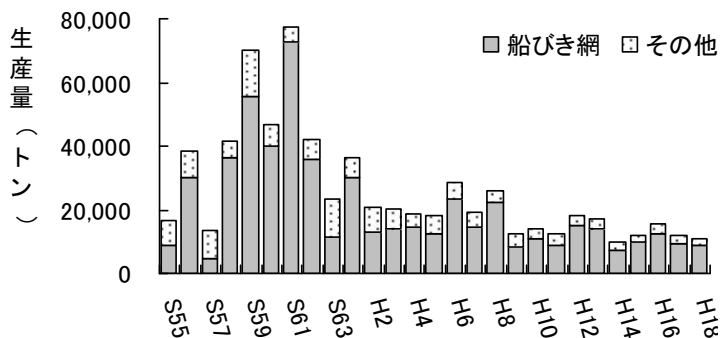


図 11-1 沿岸漁業の生産量の推移
※平成 19 年調査より統計対象外

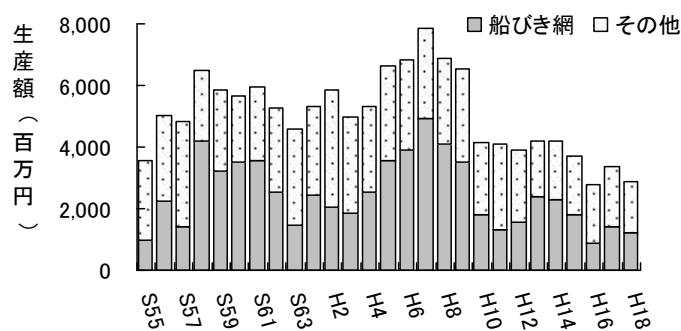


図 11-2 沿岸漁業の生産額の推移
※平成 19 年調査より統計対象外

●資料編 2-1

【船びき網漁業】

船びき網漁業は、3～5 トン船を中心に営まれている、本県主要漁業の一つです。主な漁獲対象種は、しらす、おきあみ、いかなごの回遊性資源です。その来遊量の豊凶は海況条件に強く影響されることから本漁業の生産量及び生産額は大きく変動します。なお、平成以降は、春季に親潮系冷水の差し込みが弱い海況の年が多いため、暖水系資源のしらすが主な漁獲対象となっています。

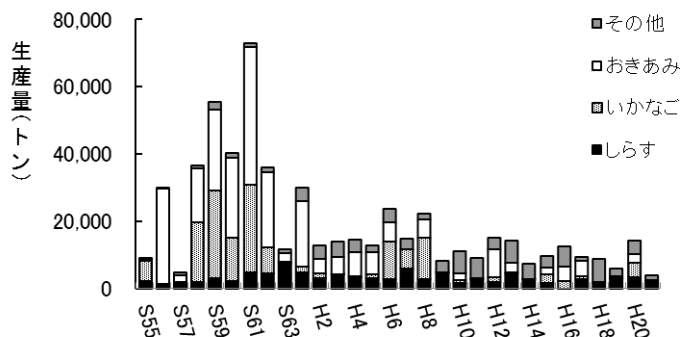


図 12-1 船びき網漁業の生産量の推移

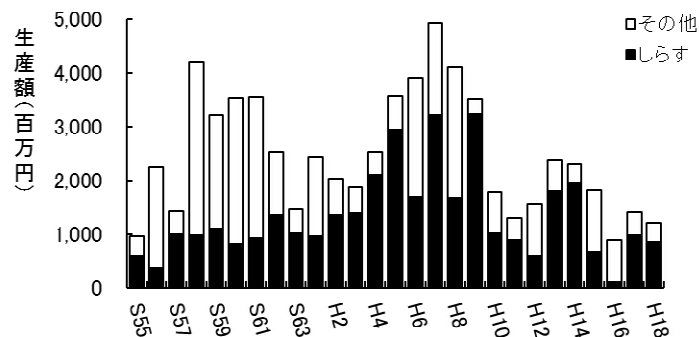


図 12-2 船びき網漁業の生産額の推移
※平成 19 年調査より生産額は統計対象外

●資料編 2-2

【小型底びき網漁業】

小型底びき網漁業には、網口開口板を使用した板びき網漁業（5 トン以上 15 トン未満船）、えび板びき網漁業及び自家用餌料板びき網漁業（5 トン未満船）と、貝桁網を用いる貝けた網漁業の 4 種類があります。

各漁業の主な漁獲対象種は、板びき網とえび板びき網漁業では、ひらめ、かれい類、たこ、えび等で、貝けた網漁業では、鹿島灘はまぐり、ほっきがい等の二枚貝類です。

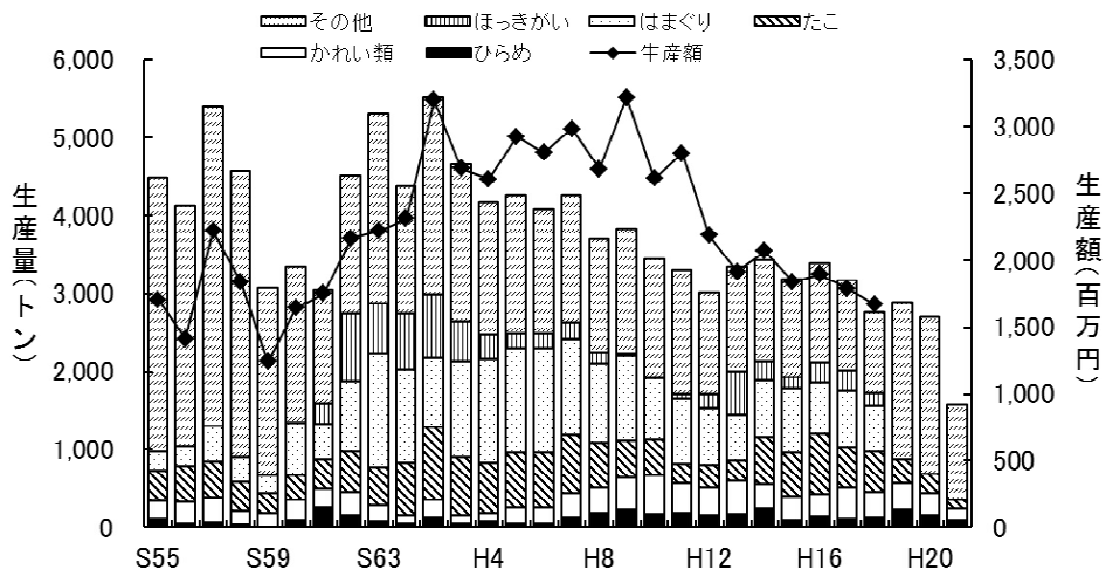


図 13 小型底びき網漁業の生産量と生産額の推移

※平成 19 年調査より生産額は統計対象外

※平成 19 年から、はまぐりとほっきがいはその他に含まれた

※平成 20 年に一部経営体が、沖合底びき網漁業へと転向したため、平成 21 年の生産量、生産額は共に大幅減少となっている。

【刺し網漁業】

沿岸で操業されている刺し網漁業には、網を潮の流れにまかせる流し網漁業と網を固定して設置する固定式刺し網漁業の 2 種類があります。主な漁獲対象は、流し網では、すずき、たい類、ぶり類であり、固定式刺し網ではひらめ、かれい類、あいなめ等となっています。

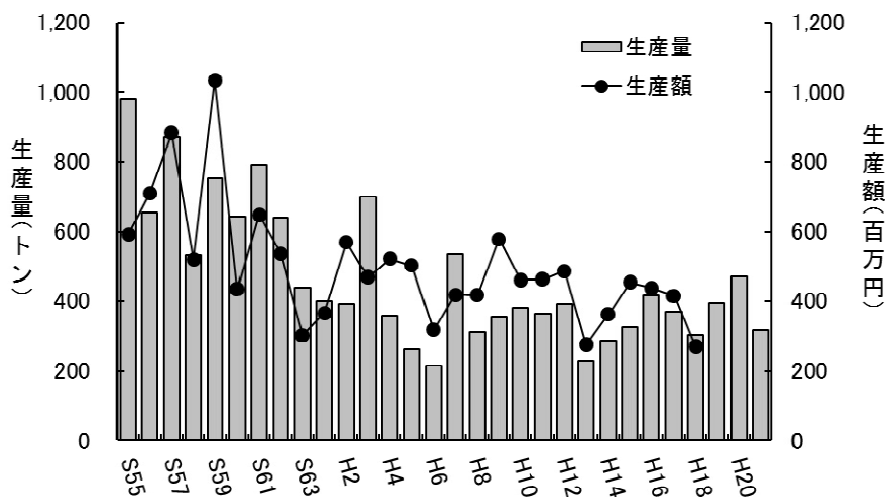


図 14 刺し網漁業の生産量と生産額の推移

※平成 19 年調査より生産額は統計対象外。

※固定式刺し網の生産量は当漁業の主要魚種であるひらめが減少したため、全体では減少した。

(2) 主な魚種別の生産量と生産額

平成 21 年の主な魚種別漁獲量は、大中型まき網漁業により漁獲されるさば類、かたくちいわし、まいわしの 3 種で漁業生産量の 84.0%を占めています。一方、魚種別生産額は、さば類、かつお、かたくちいわし、まいわしの他に、沿岸漁業で漁獲される単価の高いしらすの割合も高く、この 5 種で漁業生産額の 87.4%を占めています。

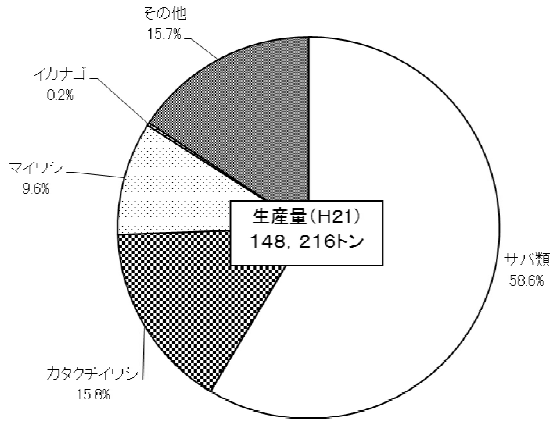


図 15-1 魚種別漁獲量の割合

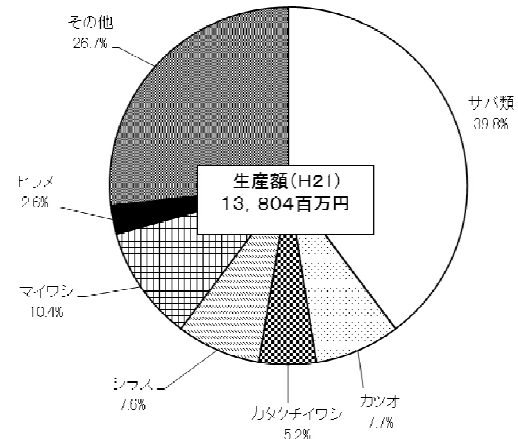


図 15-2 魚種別生産額の割合
※平成 19 年調査より、はまぐりはその他貝類に分類された

●資料編 2-3, 2-4

(3) 栽培漁業対象種を生産量と生産額

本県の主な栽培漁業対象種は 4 種（ひらめ、すずき、あわび、鹿島灘はまぐり）です。ほっきがいについては天然資源が豊富なため、平成 17 年より種苗の生産、放流を休止しています。平成 21 年のひらめ、すずき、あわびの計 3 種の生産量は計 332 トン（平成 19 年調査より、鹿島灘はまぐりはその他貝類に分類され未公表）で、海面漁業生産量のわずか 0.2%にすぎませんが、生産額では計 5 億 1300 万円をあげ、漁業生産額の 3.7%を占める重要な位置を担っていますが、資源量は漸減しており、資源の回復が課題となっております。

鹿島灘はまぐりの生産量及び生産額は、平成 19 年から統計数値が未公表となったものの、平成 18 年では 579 トンと全国第 1 位の生産を上げており、生産額でも 6 億 7,200 万円と沿岸漁業生産額の 23.3%を占める重要資源となっています。そのため、漁業者は資源を持続的に利用することを目的に、自主的に操業日及び操業時間の規制、水揚金額のプール化等を内容とする資源管理型漁業を実践しています。

また、ひらめについては栽培漁業協会による種苗放流と 30cm 未満の小型魚保護を中心とした資源管理が行われています。

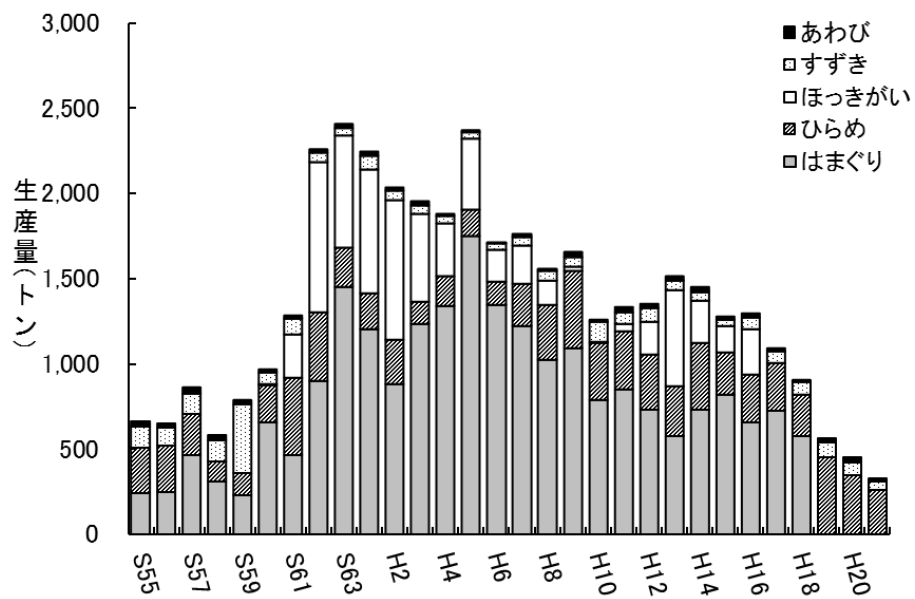


図 16 栽培漁業対象種の生産量の推移
 ※平成 19 年調査より、はまぐりはその他貝類に分類された
 ※ほっきがいについては、平成 17 年より休止

●資料編 6-4, 6-5

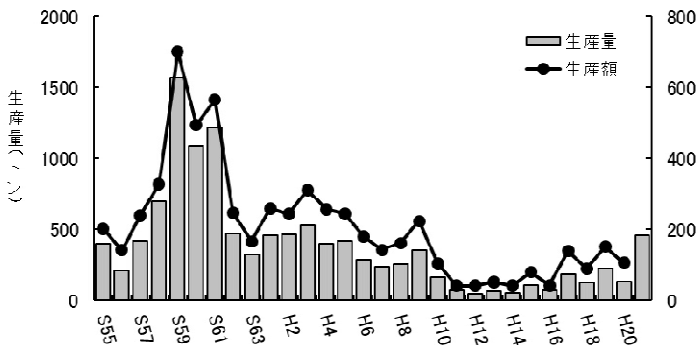


図 18-1 わかさぎの生産量と生産額の推移

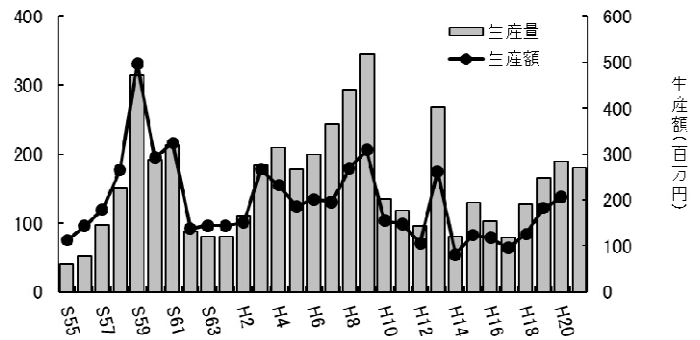


図 18-2 しらうおの生産量と生産額の推移

●資料編 2-5~2-9

(2) 養殖業の動向

① 小割式養殖業

昭和 40 年代初めに導入されたこいの小割式（湖内にいけす網を設置する）養殖業は、陸上池よりも施設の経費が少なく、多量に飼育することができるという利点から急速に普及し、全国一の生産をあげるようになりました。

こいの生産量は、昭和 57 年に最高の 8,640 トンを記録しましたがその後は、魚価の低迷による転廃業や需要動向に見合った適正な生産規模への移行等により減少傾向にありました。平成 15 年以降、コイヘルペスウイルス（KHV）病の発生によりこい養殖は休止されていましたが、KHV 病耐性コイの生産技術の開発などにより、平成 21 年 4 月から再開されています。

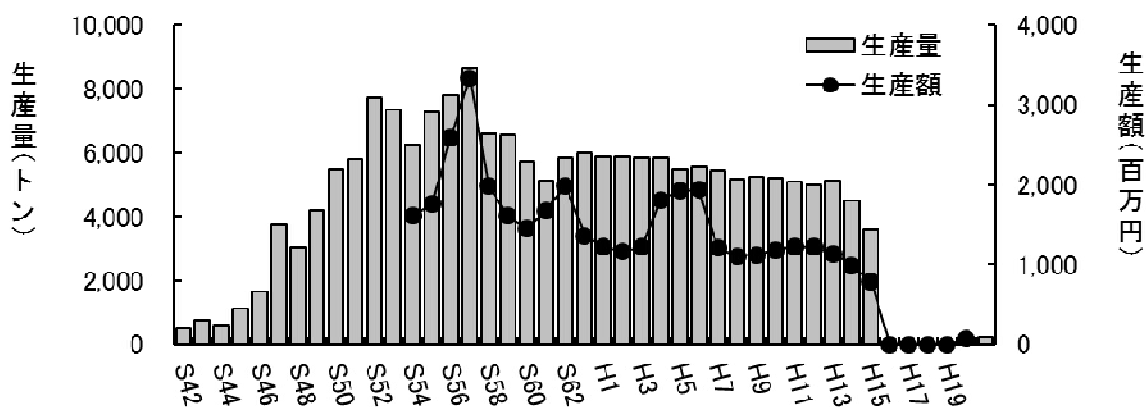


図 19 霞ヶ浦北浦のこい養殖生産量と生産額の推移

●資料編 2-5~2-9

② 淡水真珠養殖業

霞ヶ浦及び霞ヶ浦流入河川の河口付近では、「いけちょうがい」による淡水真珠養殖業が営まれています。

3 内水面漁業・養殖業（霞ヶ浦北浦を除く）

（1）漁業

霞ヶ浦北浦を除く湖沼や河川では、こい、ふな、あゆ、ぼら類、しじみが主な対象種となっています。利根川では、こい、ぼら類などが漁獲され、那珂川では、あゆ、しじみ（那珂川水系涸沼川）などが主要な漁獲対象になっています。また、久慈川ではあゆが、涸沼では、しじみが主に漁獲されています。

近年の内水面漁業生産は総じて、河川環境の悪化や資源の減少などにより、徐々に減少する傾向にあります。

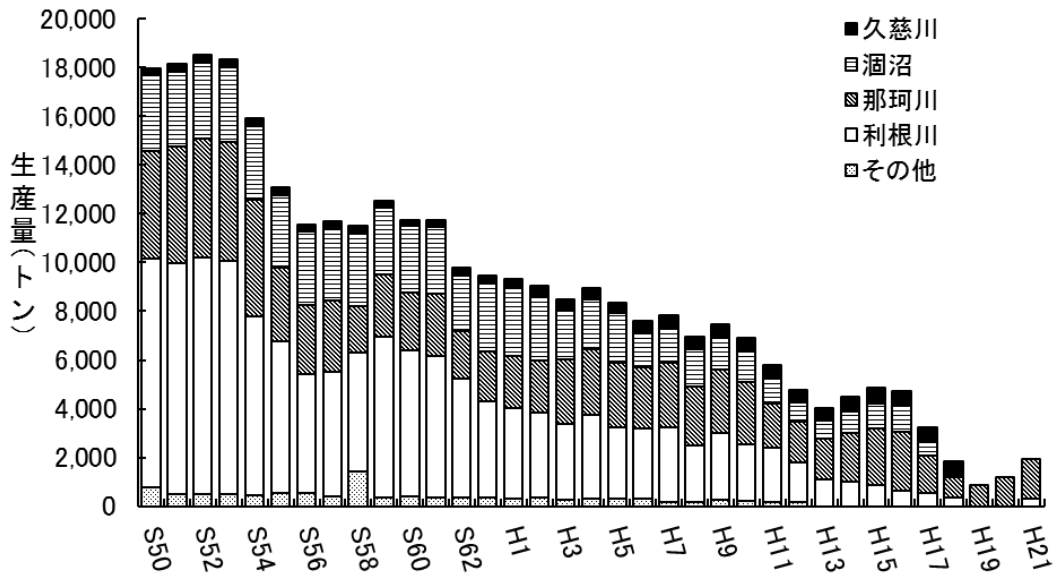


図 20-1 内水面漁業の河川(湖沼)別生産量の推移
 ※平成 19 年調査より、利根川、久慈川、涸沼の生産量は非公表

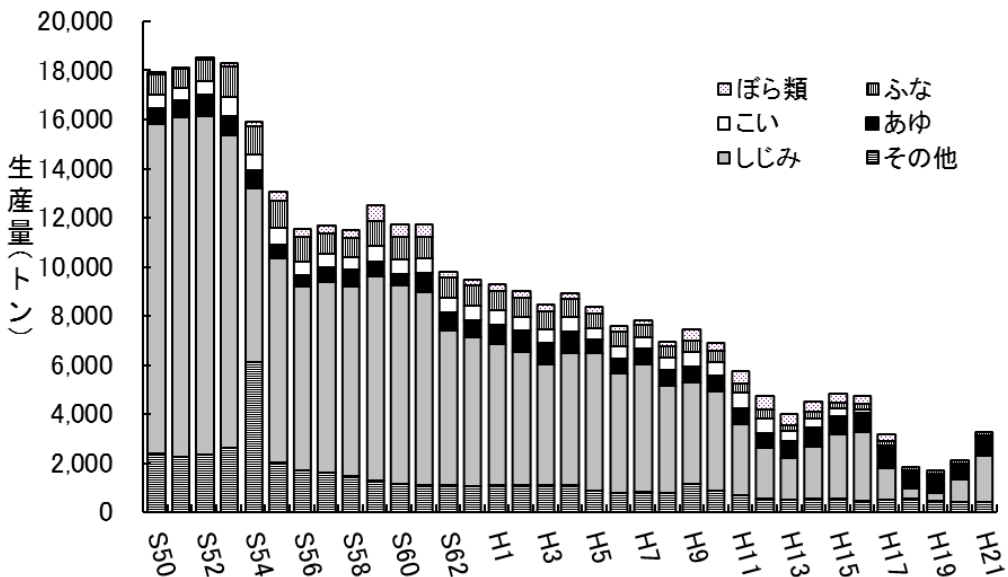


図 20-2 内水面漁業の魚種類別生産量の推移

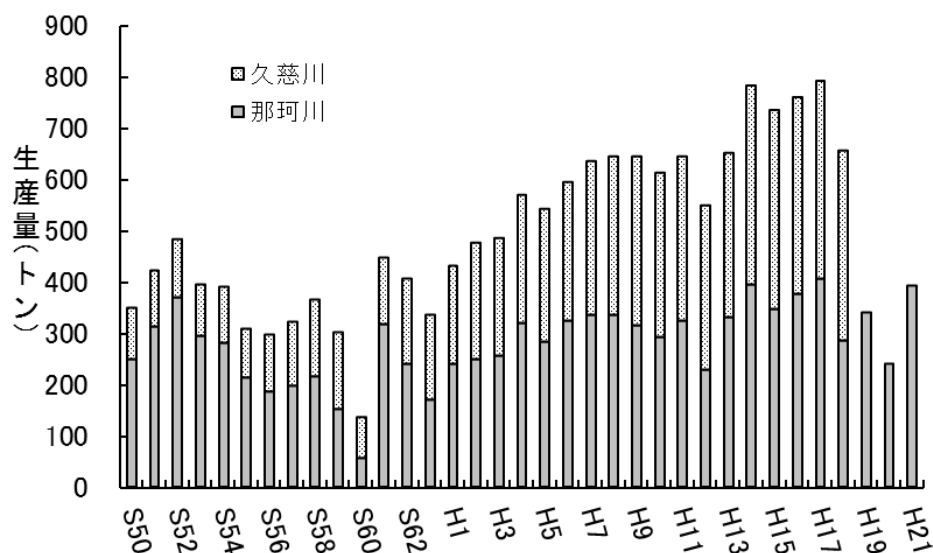


図 21-1 主要河川別あゆの漁獲量の推移
 ※平成 19 年調査より, 久慈川の生産量は非公表

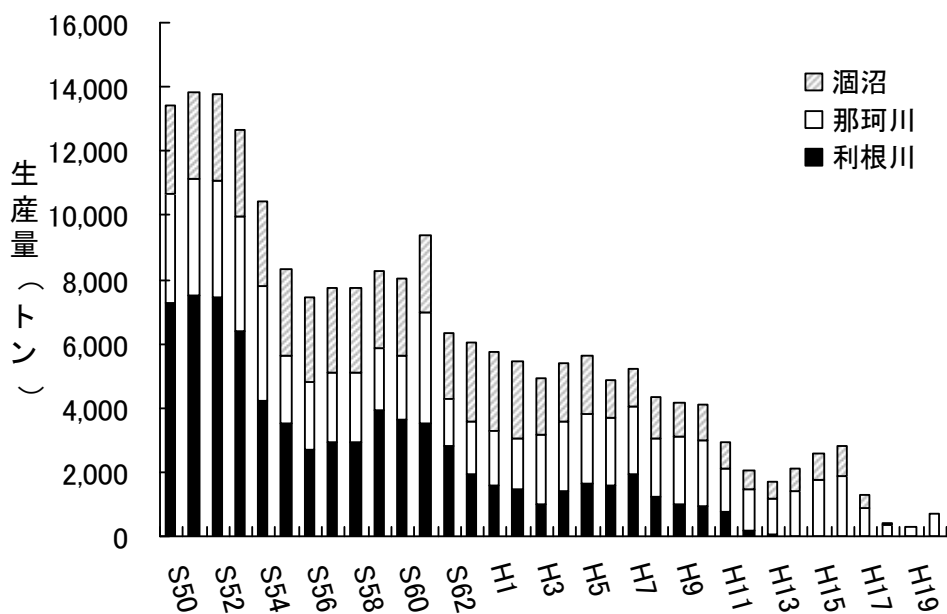


図 21-2 主要河川(湖沼)別じみの漁獲量の推移
 ※平成 19 年調査より, 涸沼及び利根川の生産量は非公表

●資料編 2-11, 2-12, 2-14

(2) 養殖業

にじます, やまめ等のます類などが養殖されています。平成 21 年の生産量は 22 トンです。

●資料編 2-11